「自分」の発話意図

佐野香織

ZIBUN as a Manifestation of the Speaker's Intention

Kaori Sano

Most of the linguistic reserch on the Japanese ZIBUN has been done through syntactic analysis. This paper attempts to explicate the usage of ZIBUN in terms of the speaker's intention. Our claim is ZIBUN-form has "core-concept", which represents the speaker's harmonious attitude. Using this concepts, this paper will discuss the various types of ZIBUN-form. We conclude that the speaker's intention in using ZIBUN is a manifestation of the speaker's demanding attitude for the hearer to become the same psychological state as the speaker's. This conclusion could be explicable that some usage of ZIBUN has a "buffer" function to the hearer.

【キーワード】：自己の２分、内部世界の共有、話し手の協和志向性、緩衝効果

0.　はじめに

日本語の照応表現「自分」については、単一文内において「先行詞は主語である」という統語的条件が研究されてきた。（Kuroda (1965), 井上(1976)等）しかし、なぜ、話し手が「自分」を発話するのか、という語用における発話意図の分析はされていない。それは、話し手の、聞き手への考慮をいれた分析がなされていないからである。

例えば、次の例は、「自分」と「彼」の両方との解釈が可能である。

(1)　太郎iは　自分i/彼iの家のことが　気になって仕方なかった。

従来の研究では、「自分」が何と照応しているのか、ということが問題となっていたが、本稿では、話し手が「自分」を発話した場合の意味を考察する。つまり、

(1) で「自分」と「彼」のどちらを発話するかによって、話し手の、聞き手に対する発話意図は異なる、という観点から考察をすすめる。この発話意図を探るために、「自分」という表現形式が持つ、根本的な特徴をとらえだそうと試みた。

以下に、まず、先行文献を概観し、話者指示詞的用法 (logophoric)を別扱いにするのではなく、それを含めたものを「自分」の文法形式としてとらえ直す。次に、主語指示対象を先行詞とする「自分」を使用する例を分析し、(2)のような「自分」の根本的な表現特徴を提出する。

(2)　「自分」は、話し手が主語指示対象を「自己の2分」することにより、聞き手に対する、話し手の協和志向性を表す。

そして、この「自分」の表現特徴と、「自分」の発話意図と密接な関わりを考察していき、「自分」が、聞き手に対する心理的影響を考慮した「緩衝効果」をあげる対人的機能を持つことがあることを述べる。

1.　「自分」の用法

従来、「自分」の統語的分析としては、井上 (1976) に代表されるように、『自分』の先行詞は主語でなければならない」という研究が主であった。しかし、「自分」には必ずしもこの制約にあてはまるものばかりではないことが明らかになっている。次に、「自分」のいくつかの用法を挙げる(廣瀬1996)。

(3)　再帰的用法
(3) a.　太郎iは　自分iのことを　責めた。　(廣瀬　1996)
　　b.　太郎iは　* 彼iのことを　責めた。
(4)　視点的用法
　　太郎iは　花子が自分iに貸してくれた自動車を　修繕した。(久野　1978)
(5)　話者指示詞的用法 (logophoric)
(5) a.　ビルiは　ジョンjに　メアリーkが自分i/*j/kを 憎んでいることを　話した。　(Kameyama 1984)
　　b.　太郎iは　次郎jに　自分i/jとそっくりな男がいると　言われた。

再帰的用法は、行為者の行う動作が行為者自身に帰ってくる、つまり、動作の再帰性を表す典型的な文法形式である。「自分」は主語指示対象と照応する。aでは、行為者である「太郎」に「責める」という動作が太郎自身におよぶ、というように解釈できる。

視点的用法は、「自分」の照応対象の視点から、「自分」が現れる節における出来事を描く用法である。(4)では、「自分」の照応対象である「太郎」の視点から「花子が自転車を貸す」という出来事を、記述していることがわかる。

話者指示詞的用法は、(3)(4)の用法では「自分」の照応対象を明確にできない例を特別に扱った用法である。発話、思考、意識等を表す動詞の引用節に現れる「自分」は、その引用節の発話主体、思考主体を示す、というものである。(5a)の例でも、主文の主語指示対象であるビル、引用節主語指示対象であるメアリーの両方と「自分」は照応するが、メアリー＝自分、という解釈よりもビル＝自分という解釈のほうがしやすいことがわかる。また、(5b)では、非主語である「次郎」とも照応する。それは、主文の述語が発話を表す動詞で、「次郎」が引用節の発話主体であるという解釈が可能なためである。

このように、「自分」にはいくつかの用法があるが、(3)(4)の2つの用法には結局、「『自分』の先行詞が主語でなければならない」（井上(1976)）という、強い構文的制約が共通にしてあるように思われる。また、(5a)、(5b)の例にしても、非主語とも照応するが、主語との照応も可能である。そこで、本稿ではこの性質を取り上げ、「自分」の基本的な文法形式を大きく次のようにとらえる。

(6)　「自分」は、述語の経験者である主語指示対象と照応する。

この(6)の文法形式は、(3)の再帰的用法が典型的な用法であるといえる。それは、(3b)の「自分」を「彼」に置き換えると不適格文になることからもわかるように、この用法では、「自分」を選択した文のみが適格文になるといえるからである。

次に、このような再帰的用法の例を分析することで、「自分」の表現特徴を提示することを試みる。

2.　「自分」の表現特徴

再帰的用法は、動作主の動作の再帰性を表す文法形式であり、次のような例が挙げられる。

(7)　知子iは　自分i/*彼女i　をよく分かっていない。
(8)　太郎iは　自分i/*彼i　に腹がたって情けなかった。
(9)　親友に殴られて、次郎iは　ようやく自分i/*彼i　を取り戻した。

これらの例は、「自分」を「彼」「彼女」等の人称代名詞に置き換えると、それらが主語と照応するという解釈のもとでは不適格文となる、という例である。

廣瀬(1996)では、この場合の述語動詞には、人の主体的な意識作用を表す動詞がくる、と述べている。「自分を愛する」、「自分を主張する」、「自分が嫌になる」、等にも同じことがいえる。

これらの述語動詞の「自分」の例に特徴的なことは、述語動詞の行為を経験していながら、同時に主語指示対象である経験者自らを他人を眺めるように眺めることができることである。大江(1975)では、このような行為のことを、「自己の2分」と呼んでいるが（注1）、人の主体的な意識作用を表す動詞とは、言い換えれば、再帰形式において「自己」を2つに分けることができる動詞、つまり「自己の2分」を求める動詞である、といえる。(10)の「主張する」という動詞でこのことを確かめてみる。

(10)　私iは　今度ばかりは　自分i/*私i を主張した。

「主張する」という行為を話し手に再帰させるためには、話し手＝「私」の内部世界を、他人を眺めるように眺めなければ不可能なことである。そのため、「自分」を「私」に置き換えると、不適格文になる。

大江(1975)では、「自己の2分」によって主観表現を行う表現には、次のようなものがあるとしている。

(11)　太郎は 寂しがっている。

(11)のような、「がる」動詞を使った表現は、第三者の主観的な感情を表すための表現であるとされてきた。しかし、大江（1975)では、それには反例があるとして(12b)のような例をあげている。

(12) a.　ぼくがこんなに会いたいのに、太郎は一向にやってこない。
　　 b.　ぼくがこんなに会いたがっているのに、太郎は一向にやってこない。
　　（大江　1975)

大江(1975)では、(12a)より、(12b)のほうが、話し手の太郎に会いたい気持ちを強く表す、としている。それは、話し手が自らの「寂しい」という感情を直接経験しながら、なおかつ外から話し手自身を他人を眺めるように眺めることで、話し手の主観的感情が話し手のものだけではなく、聞き手のものにもなるようにしているからであると述べている。つまり、話し手が聞き手を、話し手自身の内部世界に引き込もうとしている、ということである。本稿では、このことを「協和」と呼ぶ。

このように、「～がる」表現の特徴の核となることが、話し手の聞き手に対する協和を求める志向性だとすれば、「自分」にも同じことがいえる。「自分」も、「自己の2分」によって、話し手の主観的な内部世界を聞き手に提示し、内部世界に引き込む志向性を表したものであるといえる。

この考察に基づいて、(8)の例を見てみる。

(8)　太郎iは　自分iに　腹が立って情けなかった。

「腹が立つ」は、再帰形式において「自己の2分」を求める動詞であるといえる。話し手は、太郎が「腹が立って情けなかった」という感情を持っている、ということを話し手の内部世界に持っている。そして、これを聞き手に提示し、話し手の内部世界に聞き手を引き込もう、協和しようという姿勢が話し手に見受けられる。この志向性を話し手が表現するために、「自分」を使用して、話し手＝「太郎」＝主観直接経験者ego1と、それを外から眺めるego2という、「自己の2分」を行っていると説明できる。

また、「自分」の語彙的な意味として、「自らを分ける」「分身」といった意味

を持つことからも、「自己の2分」は「自分」の性質であるといえる。

このように、「自分」は、感情を直接経験しているego1と、外へ離れたego2で、話し手の、聞き手に対する協和志向性を表す表現であると考えられる。

以上をまとめると、「自分」には次のような表現特徴が核としてあることが挙げられるだろう。

(13)=(2)　「自分」は、話し手が主語指示対象を「自己の2 分」することにより、聞き手に対する、話し手の協和志向性を表す。

次に、この表現特徴が、話し手の「自分」の発話意図とどのように関わっているのかを考察する。

3.　「自分」の発話意図

再帰的用法の「自分」は、2節で見たように、人称代名詞と置き換えると不適格文になる例であった。

(9)　親友に殴られて、次郎iは　ようやく　自分i/*彼iを　取り戻した。

(9)は、述語動詞が「自己の2分」を求める動詞であるため、「自己の2分」を行う必要があるといえる。しかし、(14)のような視点的用法の場合、「自分」と人称代名詞の両方が主語指示対象と照応する。

(14) a.　太郎iは　自分i　の後ろに本を置いた　(廣瀬　1996)
　　 b.　太郎iは　彼i　の後ろに本を置いた。

この場合、話し手の意図に注目して問題となるのは、話し手がなぜ「自分」を発話するのか、または、なぜ「彼」を発話するのか、ということである。

先に2節の(13)であげた「自分」の表現特徴では、「自分」は「自己の2分」により、話し手が聞き手に内部世界を提示し、聞き手を引き込む協和志向性を表す、ということであった。話し手が「彼」を発話するとき、「彼」は話し手の一方的な情

報にすぎない。聞き手は、単なる情報の受け手となる。そのため、(14b)で太郎が本を置く位置は、話し手から見て太郎の後ろであっても、聞き手から見ては、太郎の後ろではない可能性もある。

話し手が「自分」を発話するとき、協和志向性を表すことで、話し手は聞き手と内部世界を共有する姿勢を持っているようにみえる。(14a)の「自分」は「太郎の後ろ」という情報を話し手が聞き手と共有するため、発話したものである。つまり、聞き手から見て実際にどの位置に本があろうと、聞き手は話し手が持つ「太郎の後ろ」という位置を共有の情報として持つことになる。それは、話し手が発話した協和志向性を表す「自分」によって、聞き手が話し手の内部世界に引き込まれ、話し手と情報を共有する、と考えられるからである。

このように、「自分」を発話する意図は、話し手が、話し手の内部世界を、聞き手と共有しようとすることにあるといえる。(14)で、話し手が「自分」と「彼」のどちらを選択するかは、話し手が聞き手との共有を求めているか、いないかにあり、これを分析するためには、コンテクスト、状況、話し手の心情等の語用的な分析が必要である。

(15)のような話者指示詞的用法の場合も、話し手が「自分」を発話する意図を考える、という観点から考察してみると、次のように分析できる。

(15)　太郎iは　弟jが自分i/j を嫌いだと　思っている。

(15)では、話し手が「太郎」、もしくは「弟」のどちらが関係節内のことを「思っている」ということを話し手の内部世界に持っている。そして、どちらを聞き手と共有したいと思っているかによって、先行詞は決定される。しかし、その決定には語用的な分析が必要である。

次のような、「自分」の先行詞が一文中に明示されていない場合も同じである。

(16)　僕は彼女に対しては何でも正直に素直に話すことができた。
彼女と一緒にいると、この10年以上の間に自分が失いつづけてきたものの重みをひしひしと感じることができた。　(村上　1992:90)

(16)の「自分」は文中に先行詞をとらず、その前のパラグラフのコンテクストを含めると、(16)の話し手である、「僕」と照応することがわかる。(16)の「話し手」は、「自己の2分」を行って、聞き手と、話し手自身の内部世界を共有することを求めて、協和志向性を表す「自分」を発話しているといえる。

以上のように、「自分」の発話意図は、話し手の協和志向性を表す「自分」を使用することで、話し手の内部世界を聞き手と共有しようとすることを示した。

しかし、上記の例は、先行詞の曖昧性はあるが、コンテクスト、話し手の心情をいれて語用的に分析すれば、先行詞の曖昧性は解除される例であった。「自分」には、(17)のような、先行詞が不確定で（注2）、誰を先行詞にしても当てはまるような用法がある。

(17)　だから、そういう自分に対する、自分の、そのー、広さっていうものを広げたいっていうことがありますからね。　(Hinds 1986)

(17)の「自分」は、"generic"な自分（Hinds 1986）と呼ばれているもので、特定しない人を示す機能を持つという。次節では、(17)のような例において、「自分」の表現特徴が、どのように「自分」の発話意図と関わっているのかを考察する。

4.　"generic"な自分

特定の人を先行詞として示さない、"generic"な「自分」には、次のような例がある。

(18)　人に頼らなくても、自分でなんか、恋愛相手、出来そうな気がするんだけど。　(ｱﾊﾞﾝﾃｨｰ 7.29.95)（注3）

(19)　自分から言う楽しみを残しておくのね。　(ｱﾊﾞﾝﾃｨｰ7.29.95)

(20)　自分のことは　自分でよく考えていかないと、やっぱり、だめです。　(ｻｳﾝﾄﾞｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬｰ 11.26.95)

(21)　一人で描いている時はねえ、絵も自分なりの世界に入っているんだけれど、並べてみると、本当に違うし、それぞれに良いところもあるんですよね。　(ｱﾊﾞﾝﾃｨｰ 2.12.96)

「自分」の発話意図

(18)～(21)の例は、「自分」に照応するのが特定の人ではなく、「一般的に誰にでも」照応する、という表現方法である。

この表現では、先行詞が明示されておらず、また、誰に照応するのか、不確定であるといえる。例えば、(18)の「自分」は、「話し手」と解釈しても、また、「聞き手」と解釈しても、まったく関係のない第3者と解釈しても良い。それは、先行詞の解釈の曖昧性とは異なる。曖昧性は、コンテクストや話し手の心情が明らかになれば、先行詞の候補としての解釈は一つに絞られる。“generic”な「自分」の場合の不確定性は、先行詞の解釈は聞き手次第、という話し手の表現意図がある。つまり、誰と解釈しても、話し手としてはかまわない、ということから、直接指し示すことを避け、聞き手の心理的な影響を考えて表現をやわらげる、緩衝効果を考慮にいれた表現方法であると考える。

例えば、(19)の例では、「自分」は、「話し手」としても、「聞き手」としても考えられる。それは、話し手が聞き手にその判断をゆだねているためである。(19)の話し手の心情としては、「聞き手」と照応させて考えているかもしれないが、それをはっきり示すと直接的すぎるため、「一般的に誰でも」というように遠回しに表現している、とも考えられる。そのため、この用法の場合は、先行詞をはっきりと明示できない、あるいは意図的に明示しないのだと考えられる。

(20)の「自分」も、話し手としては、聞き手を示しているのかもしれない。しかし、そのことを直接示すと聞き手に対してきつい印象を与える文となる。それは、(20a)'、(20b)'と(20)を比べてみると分かる。

(20)' a. あなたは　自分のことは　自分で良く考えていかないと、やっぱりだめです。

b. あなたのことは　あなたが良く考えていかないと、やっぱりだめです。

(20a)'、(20b)'は、直接聞き手を示して表現しているため、聞き手に心理的にきつい印象を与えることが分かる。

(21)の例を考えてみる。(20)の例は、聞き手にマイナスイメージを与える例であったが、プラスのイメージを与える(21)の「自分」が照応する「誰でも」にはプ

ラスイメージの「話し手」も含まれている。話し手は、話し手自身だけがプラスのイメージになることを避け、話し手を表立たせないようにしている訳である。これは、話し手が表立った場合の聞き手への影響を考えての緩衝効果であると考えられる。

以上のことをまとめると(22)となる。

(22)「自分」が特定の人と照応しない場合、その「自分」は、聞き手に緩衝効果をもたらす機能を持つ。

「自分」の表現特徴に当てはめて考えてみると、主語指示対象として「誰でも」という範疇がとらえられていて、その「誰でも」を話し手が「自己の2分」をすることにより、聞き手と共有することを求めて「自分」を発話している、と考えられる。しかし、「誰でも」を共有する、ということはつまり、話し手の真に意図するところは分からず、判断は聞き手にゆだねられているといえる。

以上のように、「自分」の先行詞が不確定である、“generic”な「自分」においても、「自分」の表現特徴で捉えることが可能であることが分かる。この表現は、主語指示対象を不確定にすることによって、特定の人を直接示すことを避け、対人的機能として、話し手と聞き手の間をやわらげる「緩衝効果」を挙げる表現であるといえる。

5．終わりに

本稿では、「自分」を含む表現形式には核になる表現特徴があり、その特徴によって、話し手の発話意図が理解できることを示した。「自分」の表現特徴は次のようなものである。

(23)=(13)＝(2)　「自分」は話し手が主語指示対象を「自己の2分」することにより、聞き手に対する、話し手の協和志向性を表す。

この特徴により、「自分」を発話する場合は、話し手が、話し手の内部世界を聞き手と共有しようと求める姿勢があることを考察した。

また、「自分」の先行詞である主語指示対象が不確定である場合、対人的機能として、(24)のような「緩衝効果」があることを指摘した。

(24)＝(22)　「自分」が特定の人と照応しない場合、その「自分」は、聞き手に緩衝効果をもたらす機能を持つ。

以上、「自分」には様々な用法があるが、その発話意図は、「自分」の根本的な表現特徴により、説明が可能であることを本稿で述べた。

注1　「自己の2分」とは、大江(1975)の用語である。話し手が、内的感情を直接経験するego1であると同時に、外に抜けでたego2として、主観的経験をしているego1を外から眺めることである。
2　「不確定性」は、山梨 (1992)からの借用語である。
3　これらの例は、東京FMトークラジオ番組「アバンティー」、「サウンドアドベンチャー」を文字おこししたものである。

【参考文献】

井上　和子　(1976)　『変形文法と日本語・下』　大修館書店
大江　三郎　(1975)　『日英語の比較研究　主観性をめぐって』　南雲堂
Kameyama, Megumi (1984) "Subjective/logophoric Bound Anaphor Zibun", *Chicago Linguistics Society*,20, Dept of Linguistics,University of Chicago.
久野　　暲　(1978)　『談話の文法』　大修館書店
Kuroda, Shigeyuki (1965) Generative Gramatical Studies In the Japanese Language. Ph.d. dissertation. MIT
Hinds, John(1986) Japanese. Croom Helm descriptive grammars: Rourtledge
廣瀬　幸夫　(1996)　「日英語再帰代名詞の再帰的用法について」月刊『言語』no.7 vol.25
佐野　香織　(1995)　『照応形「自分」の語用的研究」　神田外語大学大学院修士論文
山梨　正明　(1992)　『推論と照応』　くろしお出版

【引用文献】

村上　春樹　(1992)　『国境の南、太陽の西』　講談社

【追記】

本稿は佐野(1995)『照応形「自分」の語用的研究』をもとに加筆、新たにまとめたものである。本稿をまとめるにあたり、ご指導、ご助言頂いた徳永美暁先生に心より御礼申し上げる。